

まつ け が わ
松 毛 川

こ かんきょう
子ども環境ハンドブック



ふじさん まつげがわ せめねん もり
富士山と松毛川・千年の森



い もの
どんな生き物にあえるかな？

まつげがわ まな せせんかなとつかい
松毛川で学ぶ自然観察会



そら み まつげがわ かのがわ
空から見た松毛川と狩野川



みんなで協力 身近な環境改善

とくていひ えいりかつどうほうじん

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

みしま

「2023 年度日本郵便年賀寄付金助成事業」

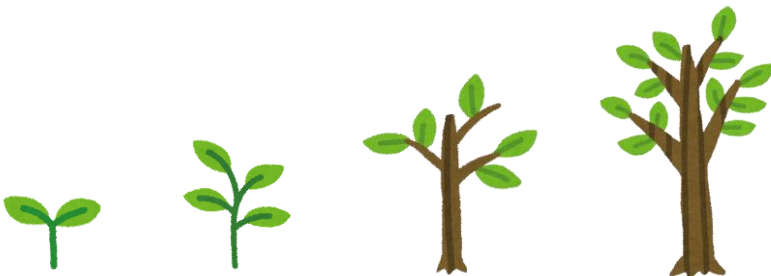


年賀寄付金



もくじ

まつげがわ 松毛川ってどんな川？	1
まつげがわ とり 松毛川の鳥たち	5
まつげがわ まわ しよくぶつ 松毛川の周りの植物たち	15
まつげがわ 松毛川のトンボたち	21
まつげがわ さかな 松毛川の魚たち	31
まつげがわ こんちゆう 松毛川の昆虫たち	37
まつげがわ りようせいらい はちゆうらい 松毛川の両生類・爬虫類たち	43
まつげがわ すいしつ ゆうすい 松毛川の水質と湧水	47
おわりに：かんきようちゆうさ 環境調査のまとめ	51
まつげがわ 松毛川のまわりのひとくちメモ	52
まつげがわしゆうへん 松毛川周辺マップ	60



まつげがわ 松毛川ってどんな川？

みしまし みなみ いち まつげがわ かのがわ いちぶ
三島市の南に位置する松毛川は、むかしは狩野川の一部でした
が、しょうわしょき かのがわ なが なお こうじ
昭和初期に狩野川の流をまっすぐに直す工事でつくられた
堤防により、川の入り口をふさ みがづきがた しすいいき いけ
水が流れず留まっている場所（三日月型の止水域（池のように、
みず なが ずとど ぼしよ とき と のこ
水が流れていない場所）となりました。その時に取り残さ
れた、まがっていた川の部分（三日月湖）と、周りの水路から流れ
こむ小川などからできているのがまつげがわ
お小川などからできているのがまつげがわです。

まつげがわ みしまし ぬまづし し さかい ぬまづしがわ
松毛川は三島市と沼津市との市の境になっています。沼津市側
では「灰塚川」という名前でも呼ばれています。ぜんたい なが
全体の長さ1,350m、
すいめん ひろ やく じゅんようかせん しちょうそん かんり
水面の広さ約6ha（ヘクタール）を、準用河川（市町村が管理す
る河川）として両方の市が管理しています。

うえ み まつげがわ
上から見た松毛川

まつげがわ
松毛川

かのがわ
狩野川

まつげがわ かんきょうあつか 松毛川の環境悪化

まつげがわ きちよう かはんりん かわぞ しんりん のこ おお
松毛川には貴重な河畔林（川沿いの森林）が残されていて、多く
 どうしょくぶつ す へいせい ねん ごろ
の動植物が住んでいましたが、平成13年（2001）頃からホテイア
 だいはんしょく すいめん おお つ やちよう わる えいきよう
オイが大繁殖し、水面を覆い尽くして、トンボや野鳥に悪い影響
 あた か か
を与えてしまいました。また、枯れたホテイアオイがヘドロ化し
 すいしつ あっか すす い もの へ
て水質の悪化が進み、生き物が減ってしまいました。

じょうりゆうがわ おも かのがわ かわぞこ じめん した なが みず ふ だ
上流側は主に狩野川の川底の地面の下を流れる水の吹き出し
 すいげん いま どころ よこ ちか
が水源だったようです。しかし今では泥や汚れがたまり、地下か
 みず わ だ ようす
ら水が湧き出す様子はほとんど見られなくなってしまいました。

ようすいろ なが こ みず いま まつげがわ おも すいげん
また、用水路からここに流れ込む水は、今の松毛川の主な水源と
 みず かにはいすい よこ よぶん
なっていますが、この水は家庭排水などで汚れてしまい、余分な
 えいようぶん おお ふく まつげがわ よこ おお げんいん
栄養分を多く含んでいて、松毛川の汚れをひどくする大きな原因
となっています。



だいはんしょく じよきよきぎよう
大繁殖したホテイアオイの除去作業

まつげがわ かんきょうさいせい 松毛川の環境再生

平成15年（2003）夏に、NPO法人グラウンドワーク三島が、
ホテイアオイの除去作業に参加するなど、松毛川再生への取り組みを始めました。

翌年には、三島市の委託で生態系調査を行い、絶滅を危惧されているメダカも確認できました。「第2の源兵衛川を目標に、松毛川をよみがえらせよう！」と、NPO法人グラウンドワーク三島では、専門家や三島市の担当者、地元の方々と協働で、再生プロジェクトを始めました。

令和6年（2023）現在まで、グラウンドワーク三島や「松毛三日月会」は、市民や大学生のボランティアとともに、放置竹林の伐採・チップ化、ゴミ拾い、植林活動、自然観察会の開催、住民参加の整備構想図の策定、ホテイアオイの除去、三島市側の私有地の河畔林のトラスト運動による買取などの環境改善・森づくりを続けています。

ちゅうがくせい しょくりん 中学生による植林のようす



このようなボランティアの皆さんの活動により、松毛川の河畔
 林では、潜在自然植生から選んだ苗木12種類の植林を8,000本
 以上も行ってきています。また、令和6年度（2024）からは、松毛
 川の水質と護岸改善のための浚渫工事（泥上げ）もはじまります。
 今後も松毛川と河畔林の再生は続いていきます。

このハンドブックは、松毛川の貴重な自然を調べるために行わ
 れている、自然環境調査の結果をまとめたものです。さて、松毛
 川にはどんな鳥、昆虫、トンボ、魚、植物がいるのかな？



しょうくりん
植林



あちくりん ぼっさい
荒れた竹林の伐採



げんざい まつげがわ かはんりん
現在の松毛川の河畔林

まつげがわ とり 松毛川の鳥たち

はじめに

野鳥は人間のよう**に食べ物を作らないかわりに、鳥たちで食物を分けあうことで食物不足をさけました。**私たちのまわりに住んでいて、魚を食べている野鳥を考えると、カワセミは小さい魚を、サギの仲間やカウウは20~30cmくらいの魚を、ミサゴというタカはもっと大きな魚を捕えます。

食べ分けるために**くちばしも変化しました。**草の実を食べるスズメやカワラヒワは皮を上手にむくくちばしになり、メジロは細かいくちばしで小さな昆虫をすばやくはさんだり、花のみつを上手にすうための便利なくちばしを持ちました。

こうして考えるといろいろな食物がたくさんある**所**が野鳥には**住みやすい場所**といえるでしょう。

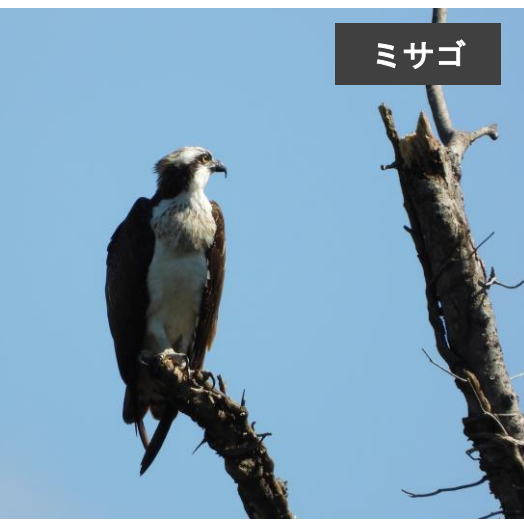
その**住みやすい場所の1つ**が松毛川のまわりにある**林**です。たくさんの種類の野鳥が集まり、センダンやエノキ、ムクノキの実を食べ、種を林にまいて**林づくりに役立ちました。**

また、この**林のつづき**に、千年前からここに**住む人たちの安全と豊作を見守っている神社**があります。神明宮といいます。数百年たったクスノキやマキの大木にかこまれた**鎮守の森**に入ると、昔の人たちも鳥たちと同じように、この神明宮の森をとて**もたよりにし、大切にしていたことがわかります。**

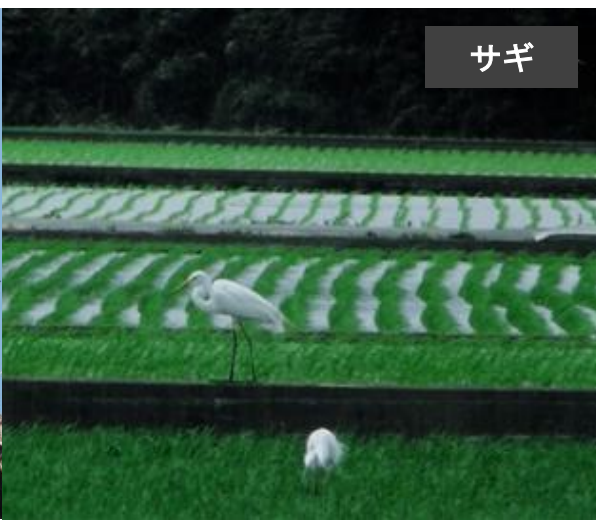
まつげがわ とり
松毛川の鳥たち



カワセミ



ミサゴ



サギ

鳥類の調査結果

期間：令和2年（2020）4月から令和6年（2024）3月の4年間

範囲：松毛川最上流部から丸善工業横の川との合流点まで

方法：毎月1回のラインセンサス法（あらかじめ決められたルートに沿って動植物の出現種類などを調査する方法）。目視、鳴き声で確認できた野鳥の種名、個体数をカウントしました。

調査の結果：

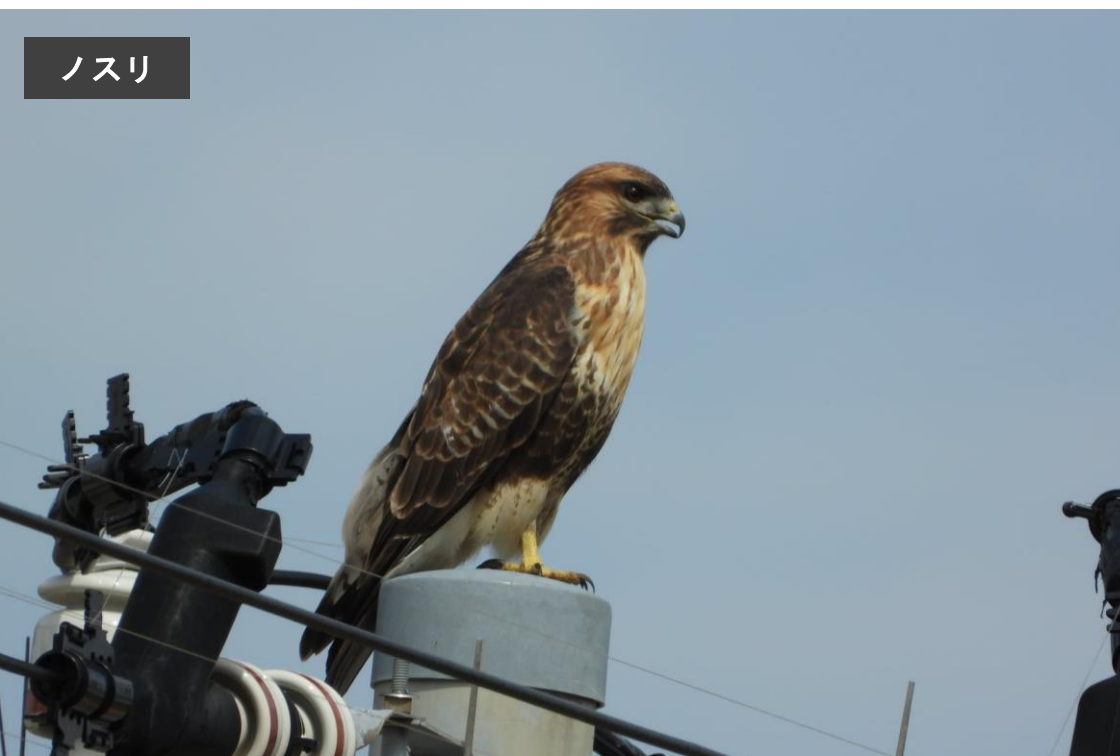
p. 9 から 10 の表は4年間に確認された鳥の種類と、何月に確認されたかを表したものです。4年間で、15目33科66種の鳥が確認されました。



ツバメ



ノスリ



ねんど まつげがわ ちょうるいちようさけっか
 2020～2023年度 松毛川の鳥類調査結果

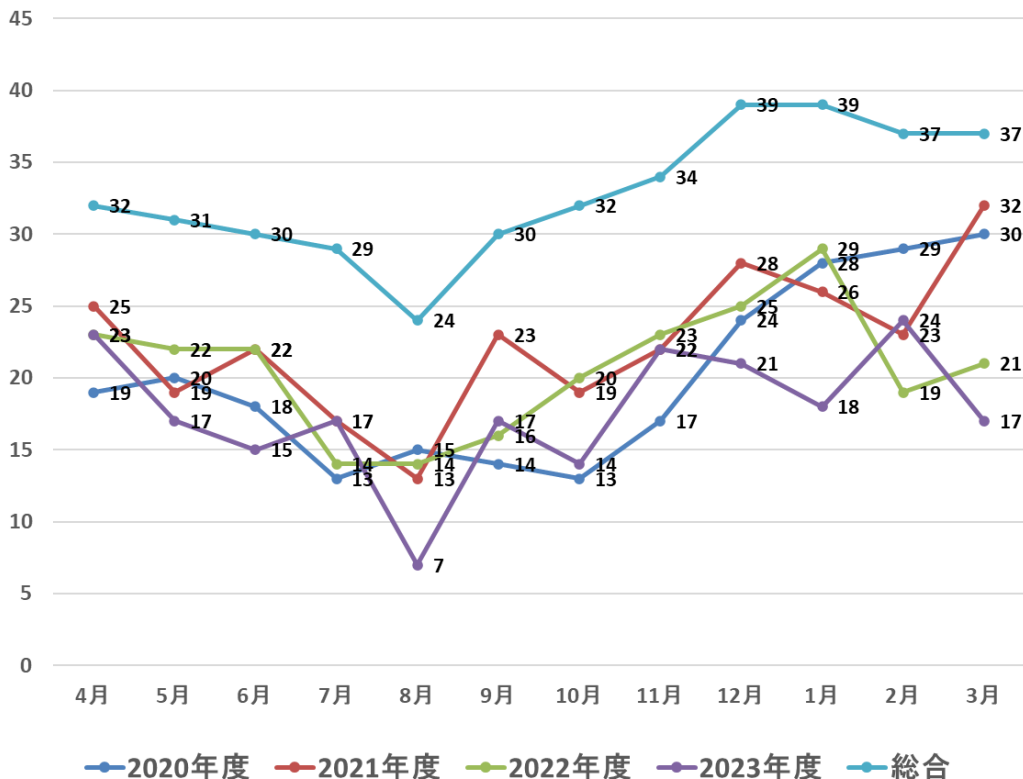
番号	目	科	種名	4月	5月	6月	7月
1	キジ	キジ	キジ	○	○	○	
2	カモ	カモ	オシドリ				
3			ヒドリガモ				
4			マガモ				
5			カルガモ	○	○	○	○
6			コガモ				
7			シマアジ	◆			
8	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	◆	◆		
9	ハト	ハト	キジバト	○	◆	○	○
10	ペリカン	ウ	カワウ	○	○	◆	○
11	コウノトリ	サギ	アオサギ	○	○	○	◆
12			ダイサギ	○	○	○	○
13			コサギ		○	○	
14			ゴイサギ			○	◆
15	ツル	クイナ	ヒクイナ	○			◆
16			オオバン	○			
17	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	◆	◆		
18			ヒメアマツバメ				◆
19	チドリ	チドリ	コチドリ	○			
20	タカ	ミサゴ	ミサゴ				
21		タカ	トビ	○	○	○	○
22			ハイタカ				
23			オオタカ				
24			ノスリ				
25	フクロウ	フクロウ	フクロウ				
26	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	○	○	○	○
27	キツツキ	キツツキ	コゲラ	◆	○	○	○
28			アオゲラ				○
29	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ				◆
30			ハヤブサ			○	
31	スズメ	モズ	モズ	○	○	○	
32		カラス	オナガ		○		
33			ハシボソガラス	○	○	○	○
34			ハシブトガラス	○	○	○	○
35		シジュウカラ	ヤマガラ				
36			シジュウカラ	○	◆	○	○
37		ヒバリ	ヒバリ	◆			
38		ツバメ	ツバメ	○	○	○	○
39			コシアカツバメ			◆	◆
40			イワツバメ				
41		ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○
42		ウグイス	ウグイス	○	○	○	○
43		エナガ	エナガ				
44		メジロ	メジロ	○	◆	○	○
45		ヨシキリ	ヨシキリ		○		
46			オオヨシキリ		○	◆	◆
47		セッカ	セッカ				○
48		ムクドリ	ムクドリ	○	○	○	○
49		ヒタキ	シロハラ				
50			アカハラ				
51			ツグミ	○	◆		
52			ジョウビタキ				
53			インレヨドリ				
54		スズメ	スズメ	○	○	○	○
55		セキレイ	キセキレイ				
56			ハクセキレイ	○	○	○	○
57			セグロセキレイ	○	○	○	
58			タヒバリ				
59		アトリ	アトリ				
60			カワラヒワ	○	○	○	○
61			シメ				
62		ホオジロ	ホオジロ				
63			カンラダカ				
64			アオジ	○			
65	外来種	キジ	コジュケイ	○	○	○	○
66		チドリ	ガビチョウ		○		◆
	15目	33科	66種	32	31	30	29

* ○は2020年度に確認された種。●は2021年度に、◆は2022年

した ひょう れいわ ねん
 下の表は令和2年（2020）から令和6年（2024）までに確認さ
 れた鳥の種類と、各月毎に何種類の鳥が確認されたかを表した
 ものです。冬には最大で1月あたり約32種類の鳥が確認されまし
 た（令和3年度（2021））。それとくらべて、夏には1月あたり13種
 類の鳥しか確認されませんでした。季節により鳥の種類の数が変わ
 るのはなぜでしょうか。冬には冬鳥、留鳥（季節による移動を
 しないで1年中同じ地域に住む鳥）、漂鳥（ある地域の中で季節に
 よって居場所を変える鳥）が観察されるのに対し、夏の季節は
 地元で繁殖する夏鳥のツバメと留鳥だけが観察されるためです。

松毛川の鳥類月別種数の変化

調査期間：2020年4月～2024年2月



★松毛川の鳥の観察ポイント

- 川があるので水辺の鳥が見られます。
- 竹・樹木・草むらがあるのでスズメ目の鳥が多く見られます。
- 稲刈りが終わった後の田畑で、ネズミや小型の鳥類を捕える
タカ類が冬に見られます。タカ類がみられるのは、土壌、植物、
昆虫、小型の鳥類が豊かである証です。
- 松毛川の標高から考えると、ウグイスは漂鳥（夏は繁殖地の
山間部に行き、冬は温暖な平地に降りて来る）になりますが、
一年中観察できます。
- オオダイサギというとても珍しい鳥は、春と秋の渡りの季節
に見られます。また、ツバメ、アマツバメ、ノビタキなど、夏鳥
の渡りのコースになっているようです。
- 松毛川の鳥の種類が多いのは、川・河畔林・田畑・開けた上空
があるからだといえます。



鳥類のために、これから考えたいこと

① 松毛川の河畔林に今より樹木を増やすと、昆虫が集まり、積み重なった落ち葉の下で生活するミミズや昆虫を餌とするアカハラやシロハラ、ジョウビタキなどのツグミ類がやって来ます。河畔林は、鳥にとって餌場以外に、睡眠、避難場所、繁殖場所でもあるたいせつなところですよ。

② 松毛川の周辺には現在、広い畑や水田があるので、タヒバリやカルガモ、ムクドリ、サギ類などの鳥が生活することができます。

③ 今の松毛川の水の深さは45cm程度と浅くなっています。できれば本来の川の深さに戻したいものです。鳥にとっては、川岸の土手が崩れないことと、水の深さは全部一緒にしないことが大切です。カモ類は水に浮かびますが、サギ類やコチドリは水の深さが浅いところや水辺で生活をしています。

④ 魚釣りの愛好者をよく見かけますが、マナーに気をつけなければいけません。外来種（外国から来た生き物）を川に放すと在来種（昔から日本にいる生き物）が生きていけなくなります。疑似餌（ルアー）や釣り糸、ビニール袋、食事のあとのゴミなどを道路や草むらの中に残したままにしないように気をつけましょう。電線や木に釣り糸を絡ませたままにすると鳥に絡まるおそれがあります。

⑤ ホテイアオイを取り除く^{と のぞ}作業^{さぎょう}をしましたが、**これからも**
 ホテイアオイが^{しんにゆう}進入^{かのうせい}してくる可能性^{しんにゆう}があります。進入^{しんにゆう}しないよう
 に^{しんにゆう}ふせぐ、または^{と のぞ}進入^{かんりほうほう}したホテイアオイを取り除く^{かんが}管理方法^{かんが}をど
 うするか^{かんが}考^{かんが}えていかなければいけません。

⑥ 松毛川^{まつげがわ}上流部^{じょうりゅうぶ}に水^{みず}の供給源^{きょうきゅうげん}がないため^たゴミが溜^たまったり、ホ
 ティアオイが^{なが}流れ^ななかつたりする問題^{もんだい}が^で出てきます。そこで^{あさ}浅^あく
 なった川^{かわ}の^{ふか}深^{もと}さを^{もと}元^{もと}に戻^{もど}したあと、最上流部^{さいじょうりゅうぶ}に^{かのがわ}狩野川^{すい}の^{すい}水位^{すい}より
 下^{した}まで^く杭^うを^こ打ち込^{ちか}めば^{すい}地下水^わが^で湧^わき出^でそう^でです。

かんしゅう
監 修

にほんやちょう かいひがしふじふくだいひょう
日本野鳥の会東富士副代表

たき みちお
滝 道雄

モズ



まつげがわ まわ むかし かのがわ ぞ は きちょう しぜん 松毛川のまわりの植物たち

はじめに

まつげがわ まわ むかし かのがわ ぞ は きちょう しぜん
松毛川の周りには、昔の狩野川沿いに生えていた貴重な自然
がのこ残されています。今ではいまこうしたふるさとのもり森は、じんじゃ神社やてらお寺
のもり森として、ところどころにのこ残されているだけとなりました。まつ松
毛川沿いのもり森やしんめいぐう神明宮のもり森は、むかし昔のしぜん自然のおもかげ面影をのこ残したたいせつ大切な
森です。今後、こんご松毛川のこうしたしよくせい植生を、ふるさとのきちょう貴重なしぜん自然
として、まも守り、そだ育てていきたいものです。



いま ^{ところ} 今 ^は どん ^な 所 ^な の ^の かな

ここ ^{まつげがわぞ} 松毛川 ^{かはんりん} 沿い ^{ふうけい} には、むか ^{のこ} しの河 ^{のこ} 畔 ^{のこ} 林 ^{のこ} の風 ^{のこ} 景 ^{のこ} が残 ^{のこ} され ^{のこ} てい ^{のこ} ま ^{のこ} す
 が、^{まわ} 周 ^{はたけ} り ^{すいでん} には ^{ひろ} 畑 ^{しぜん} や ^{もり} 水 ^{ほそ} 田 ^{せん} など ^{せん} が ^{せん} 広 ^{せん} が ^{せん} り、^{せん} 自 ^{せん} 然 ^{せん} の ^{せん} 森 ^{せん} は ^{せん} 細 ^{せん} い ^{せん} 線 ^{せん} の ^{せん} よ ^{せん} う
 に ^{のこ} わ ^{のこ} ず ^{のこ} か ^{のこ} に ^{のこ} 残 ^{のこ} さ ^{のこ} れ ^{のこ} て ^{のこ} い ^{のこ} る ^{のこ} だ ^{のこ} け ^{のこ} です。 ^{しぜん} ふ ^{もり} る ^{たいせつ} さ ^{たいせつ} と ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 自 ^{たいせつ} 然 ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 森 ^{たいせつ} は、 ^{たいせつ} 大 ^{たいせつ} 切 ^{たいせつ} な ^{たいせつ} 私 ^{たいせつ} た ^{たいせつ} ち ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 財 ^{たいせつ} 産 ^{たいせつ} です。 ^{たいせつ} 森 ^{たいせつ} と ^{たいせつ} 森 ^{たいせつ} に ^{たいせつ} 続 ^{たいせつ} く ^{たいせつ} 畑 ^{たいせつ} や ^{たいせつ} 水 ^{たいせつ} 田 ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 人 ^{たいせつ} 里 ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 風 ^{たいせつ} 景 ^{たいせつ} を
 大 ^{たいせつ} 切 ^{たいせつ} に ^{たいせつ} し、 ^{たいせつ} 多 ^{たいせつ} く ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 種 ^{たいせつ} 類 ^{たいせつ} の ^{たいせつ} 植 ^{たいせつ} 物 ^{たいせつ} や ^{たいせつ} 動 ^{たいせつ} 物 ^{たいせつ} が ^{たいせつ} 生 ^{たいせつ} 育 ^{たいせつ} で ^{たいせつ} き ^{たいせつ} る ^{たいせつ} よ ^{たいせつ} う ^{たいせつ} に ^{たいせつ} し ^{たいせつ} た ^{たいせつ} い
 も ^{たいせつ} の ^{たいせつ} ず ^{たいせつ} です。



どんな問題があるのかな

このふるさとの森を失えば、もう二度と昔の森を見ることはできなくなります。緑豊かな自然の風景を失う前に、今残されている自然の素晴らしさを学び、大切に、次の世代に受けついで行く事が望まれます。松毛川とそのまわりの植生を大切にしながら、私たちのふるさとの自然づくりに取り組まなければいけません。



どうしたらいいのかな

まつげがわぞ のこ しぜん たいせつ まも しぜん
 松毛川沿いにわずかに残された自然を大切に守りながら、自然
 ひと きょうぞん せいたいけい ふくげん しずおかけん どうぶ
 と人が共存できる生態系を復元したいものです。静岡県東部
 ちいき うしな しぜん まつげがわぞ
 地域ではほとんど失われてしまった自然が、ここ松毛川沿いに
 きせきてき のこ しぜん のこ
 は奇跡的に残されています。このかけがえのない自然を残すため
 つぎ かつどう おこな たいせつ
 に、次のような活動を行うことが大切です。

- ① さまざまな生物に触れられる豊かな環境づくり（ふるさとの
 しぜん おこな
 自然づくり）を行う。
- ② 自然と人の共存できる豊かな環境づくりを行う。その土地
 しぜん ひと きょうぞん ゆた かんきょう おこな とち
 とち
 固有の動植物を守り、育む。
 こゆう どうしよくぶつ まも はぐく
- ③ 固有の風景を神聖な地域（サンクチュアリー）としてシンボ
 こゆう ふうけい しんせい ちいき
 ル化する。水田や畑、池、沼、森をふるさと自然生態園とし
 か すいでん はたけ いけ ぬま もり しぜんせいたいえん
 て元の状態に戻す。
 もと じょうたい もど
- ④ ネイチャートレイル、観察地の内容など正しい知識を広める
 かつどう
 活動をすすめる。

かんしゅう
 監修

ふじさん しぜん しけんきゅうかい かいちょう
 富士山自然誌研究会会長
 すがわら ひさお
 菅原 久夫

まつげがわしよくぶつし
松毛川植物誌

No.	科名	和名	No.	科名	和名	No.	科名	和名
1	トクサ科	スギナ	51	タデ科	オオイスタデ	101	マメ科	ツルフジバカマ
2	ヒメシダ科	ホシダ	52	タデ科	オオミツソバ	102	マメ科	トクリマメ
3	ウラボシ科	ノキシノブ	53	タデ科	ギシギシ	103	マメ科	ツルマメ
4	イチョウ科	イチョウ	54	タデ科	シロバナサクラタデ	104	マメ科	ナヨクサフジ
5	ヒノキ科	ヒノキ	55	タデ科	スイバ	105	マメ科	メドハギ
6	ヒノキ科	スギ	56	タデ科	ナガバギシギシ	106	マメ科	ヤブツルアズキ
7	クスノキ科	カゴノキ	57	タデ科	ヒメスイバ	107	マメ科	ヤハズソウ
8	クスノキ科	クスノキ	58	タデ科	ミズヒキ	108	マメ科	ヤブマメ
9	クスノキ科	シロダモ	59	タデ科	ミチヤナギ	109	マメ科	カワラケツメイ
10	クスノキ科	タブノキ	60	ツバキ科	ヒサカキ	110	マメ科	ヌスビトハギ
11	クスノキ科	ヤブニッケイ	61	ツバキ科	ヤブツバキ	111	マメ科	ヤブマメ
12	トクダミ科	トクダミ	62	アオイ科	ゼニアオイ	112	アカバナ科	ヒルザキツキミソウ
13	シキミ科	シキミ	63	スミレ科	スミレ	113	アカバナ科	メマツヨイグサ
14	マツバサ科	サネカズラ	64	スミレ科	タチツボスミレ	114	アカバナ科	ユウゲショウ
15	キンボウゲ科	ウマノアシガタ	65	ウリ科	カラスウリ	115	モクセイ科	トウネズミモチ
16	キンボウゲ科	キツネノボタン	66	ヤナギ科	タチヤナギ	116	ミズキ科	アオキ
17	キンボウゲ科	ハンショウヅル	67	アブラナ科	イヌガラシ	117	ミズキ科	ミズキ
18	キンボウゲ科	ヒメズ	68	アブラナ科	オオバタネツケバナ	118	ニシキギ科	ツルウメモドキ
19	キンボウゲ科	ボタンヅル	69	アブラナ科	オランダガラシ	119	ニシキギ科	マサキ
20	アケビ科	アケビ	70	アブラナ科	ゲンバインナズナ	120	ニシキギ科	マユミ
21	ツツラフジ科	アオツツラフジ	71	アブラナ科	ショカツサイ	121	トウダイグサ科	アカメガシワ
22	ケシ科	ナガミヒナゲシ	72	アブラナ科	スカシタゴボウ	122	トウダイグサ科	エノキグサ
23	ケマンソウ科	キケマン	73	アブラナ科	タネツケバナ	123	トウダイグサ科	オオニシキソウ
24	ケマンソウ科	ムラサキケマン	74	アブラナ科	ナズナ	124	トウダイグサ科	コニシキソウ
25	ニレ科	エノキ	75	アブラナ科	マメゲンバインナズナ	125	トウダイグサ科	コミカンソウ
26	ニレ科	ケヤキ	76	ヤブコウジ科	マンリョウ	126	ブドウ科	ノブドウ
27	ニレ科	ムクノキ	77	ヤブコウジ科	ヤブコウジ	127	ブドウ科	ヤブガラシ
28	アサ科	カナムグラ	78	サクラソウ科	コナシ	128	センダン科	センダン
29	イラクサ科	クサコアカソ	79	ベンケイソウ科	コモチマンネングサ	129	カタバミ科	アカカタバミ
30	イラクサ科	ナンバンカラムシ	80	ベンケイソウ科	メキシコマンネングサ	130	カタバミ科	オウタチカタバミ
31	イラクサ科	メヤブマオ	81	ユキノシタ科	ユキノシタ	131	カタバミ科	カタバミ
32	イラクサ科	ヤブマオ	82	バラ科	オヘビイチゴ	132	カタバミ科	ムラサキカタバミ
33	クルミ科	オニグルミ	83	バラ科	キンミズヒキ	133	フウロソウ科	アメリカフウロ
34	ブナ科	クスギ	84	バラ科	クサイチゴ	134	フウロソウ科	ゲンノショウコ
35	ブナ科	コナラ	85	バラ科	テリハノイバラ	135	ウコギ科	オカウコギ
36	ブナ科	スダジイ	86	バラ科	ノイバラ	136	ウコギ科	キツタ
37	ブナ科	マテバシイ	87	バラ科	ヘビイチゴ	137	セリ科	オオチドメ
38	ヤマゴボウ科	ヨツシュヤマゴボ	88	バラ科	ミツバツチグリ	138	セリ科	オヤブジラミ
39	ザクロソウ科	ザクロソウ	89	マメ科	アカツメクサ	139	セリ科	コエンドロ
40	ナデシコ科	ウシハコバ	90	マメ科	アレチヌスビトハギ	140	セリ科	セリ
41	ナデシコ科	オランダミミナグサ	91	マメ科	カスマグサ	141	セリ科	ノチドメ
42	ナデシコ科	コハコバ	92	マメ科	カラスノエンドウ	142	セリ科	マツバゼリ
43	ナデシコ科	ツメクサ	93	マメ科	カワラケツメイ	143	セリ科	ヤブジラミ
44	ナデシコ科	ノミナヅリ	94	マメ科	クサネム	144	セリ科	ヤブニミジン
45	ナデシコ科	ノミノフスマ	95	マメ科	クサフジ	145	ガガイモ科	ガガイモ
46	ナデシコ科	ミドリハコバ	96	マメ科	クズ	146	ナス科	アメリカイヌホオズキ
47	ナデシコ科	ミミナグサ	97	マメ科	ゲンゲ	147	ナス科	イヌホオズキ
48	ナデシコ科	ムシトリナデシコ	98	マメ科	コメツバツメクサ	148	ナス科	クコ
49	タデ科	イタドリ	99	マメ科	シロツメクサ	149	ムラサキ科	キュウリグサ
50	タデ科	イヌタデ	100	マメ科	スズメノエンドウ	150	ムラサキ科	ハナイバナ

No.	科名	和名	No.	科名	和名	No.	科名	和名
151	クマツヅラ科	アレチハナガサ	201	キク科	ニガナ	251	イネ科	セイバシシモロコシ
152	シソ科	カキドオシ	202	キク科	ノアザミ	252	イネ科	チガヤ
153	シソ科	キランソウ	203	キク科	ノゲシ	253	イネ科	ナギナタガヤ
154	シソ科	トウバナ	204	キク科	ノコンギク	254	イネ科	ヌカボ
155	シソ科	ナギナタコウジュ	205	キク科	ハキダメギク	255	イネ科	ヌカキビ
156	シソ科	ヒメオドリコソウ	206	キク科	ハハコグサ	256	イネ科	ネズミムギ
157	シソ科	ホトケノザ	207	キク科	ハルジオン	257	イネ科	ハナヌカススキ
158	オオバコ科	オオバコ	208	キク科	ヒメムカシヨモギ	258	イネ科	ヒメコバンソウ
159	オオバコ科	ツボミオオバコ	209	キク科	ヒロハタンポポ	259	イネ科	ヒロハウシノケグサ
160	オオバコ科	ヘラオオバコ	210	キク科	フキ	260	イネ科	マコモ
161	モクセイ科	イボタノキ	211	キク科	ブタクサ	261	イネ科	マダケ
162	モクセイ科	ヒサカキ	212	キク科	ブタン	262	イネ科	ミノイチゴツナギ
163	ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ	213	キク科	ヤブタビラコ	263	イネ科	ヌダケ
164	ゴマノハグサ科	セイヨウヒキヨモギ	214	キク科	ヨメナ	264	イネ科	メヒシバ
165	ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ	215	キク科	ヨモギ	265	イネ科	アリケンカルカヤ
166	ゴマノハグサ科	トキワハゼ	216	ヤシ科	シュロ	266	イネ科	タチスズメヒエ
167	ゴマノハグサ科	ピロウトモウヅイカ	217	シヨウブ科	シヨウブ	267	イネ科	モウソウチク
168	ゴマノハグサ科	マツバウンラン	218	サトイモ科	ウラシマソウ	268	イネ科	ヨシ
169	ゴマノハグサ科	ムラサキサギゴケ	219	ツユクサ科	ツユクサ	269	バショウ科	バショウ
170	ヒルガオ科	アメリカアサガオ	220	ツユクサ科	トキワツユクサ	270	ユリ科	ジャノヒゲ
171	ハマウツボ科	ヤセウツボ	221	イグサ科	クサイ	271	ユリ科	ノカンゾウ
172	アカネ科	アカネ	222	イグサ科	スズメノヤリ	272	ユリ科	ノビル
173	アカネ科	ヒメツバムグラ	223	カヤツリグサ科	アオスゲ	273	ユリ科	ハタケニラ
174	アカネ科	ヘクソカズラ	224	カヤツリグサ科	カサスゲ	274	ユリ科	ハナニラ
175	アカネ科	ヤエムグラ	225	カヤツリグサ科	カワラスゲ	275	ユリ科	ヤブラン
176	アカネ科	ヨツバムグラ	226	カヤツリグサ科	コゴメガヤツリ	276	アヤメ科	オオニワゼキショウ
177	キツネノマゴ科	キツネノマゴ	227	カヤツリグサ科	ヒゴクサ	277	アヤメ科	キショウブ
178	クマツヅラ科	クサギ	228	カヤツリグサ科	ホンモンジスゲ	278	アヤメ科	シヤガ
179	スイカズラ科	サシコジュ	229	カヤツリグサ科	マスカサ	279	アヤメ科	ニワゼキショウ
180	スイカズラ科	スイカズラ	230	カヤツリグサ科	ヤワラスゲ	280	サルトリイバラ科	サルトリイバラ
181	オミナエシ科	ノヂシヤ	231	イネ科	アズマネザサ	281	ヤマノイモ科	オニドロコ
182	キク科	アキノノゲシ	232	イネ科	アシボソ	282	ヤマノイモ科	ヤマノイモ
183	キク科	アメリカセンダングサ	233	イネ科	イスビエ			
184	キク科	アメリカカタカサブロウ	234	イネ科	イヌムギ			
185	キク科	ウスバニチチヨグサ	235	イネ科	オヒシバ			
186	キク科	ウラジロチチヨグサ	236	イネ科	カニツリグサ			
187	キク科	オオアレチノギク	237	イネ科	カモガヤ			
188	キク科	オオジシバリ	238	イネ科	カモジグサ			
189	キク科	オオブタクサ	239	イネ科	カラスムギ			
190	キク科	オニタビラコ	240	イネ科	キッコウチク			
191	キク科	オニノゲン	241	イネ科	キツネガヤ			
192	キク科	コウソリナ	242	イネ科	ギョウギシバ			
193	キク科	コオニタビラコ	243	イネ科	キンエノコロ			
194	キク科	コシロノデンダングサ	244	イネ科	クサヨシ			
195	キク科	コセンダングサ	245	イネ科	コバンソウ			
196	キク科	セイイタカアワダチソウ	246	イネ科	コメシバ			
197	キク科	セイヨウタンポポ	247	イネ科	シナダレスズメガヤ			
198	キク科	タイアザミ	248	イネ科	シマスズメノヒエ			
199	キク科	チチヨグサ	249	イネ科	ススキ			
200	キク科	チチヨグサモドキ	250	イネ科	スズメノカタビラ			

みどりいろ せんざいしぜんしょくせい
緑色：潜在自然植生
まつげがわほんらい しょくぶつ
(松毛川本来の植物)
いろ がいらいしゅ
オレンジ色：外来種
むかし まつげがわぞ
(昔は松毛川沿いになかった、外国から来た植物)

まつげがわ 松毛川のトンボたち

はじめに

みしまし しずおかけんとうぶ いずちほう いけ
三島市をはじめとした静岡県東部・伊豆地方は、もともと池や
ぬま すく かわ みず ほうふ じんこうてき のうぎょうよう いけ
沼が少なく、川からの水が豊富なため、人工的な農業用ため池も
ほとんどありません。

るい りゆうすいせいしゅ おも かわ しすいせいしゅ おも いけ
トンボ類は、流水性種（主に川にすむ）と止水性種（主に池や
ぬま などにすむ）に分けられます。みしまし ぬまづし しずおかけん
三島市や沼津市がある静岡県
とうぶ いずちほう なか おお いけ ぬま この しゅ
東部・伊豆地方では、トンボの中でも大きな池や沼を好む種は、
なかなか見つかりません。それは、いけ ぬま かんきょう
池や沼のような環境がほとん
どないことが大きな理由です。

まつげがわ ちいき かずすく いけ ぬま かんきょう
でも、松毛川はこの地域では数少ない池や沼のような環境で、
いけ ぬま この るい だいじ
池や沼を好むトンボ類にとってはとても大事なすみかです。



松毛川の自然の移りかわり

水面が開けた池や沼が好きな代表的なトンボとして、**ギンヤンマ**、**ウチワヤンマ**、**オオヤマトンボ**などがあげられます。これらのトンボはどれも寒い地方でなければ池や沼やため池に普通に見られます。この**3種**はどれも平成2年(1990)ごろは松毛川に普通に見られました。この他にも、アジアイトトンボ、アオモンイトトンボ、クロイトトンボ、コフキトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボなどが生息していて、まわりの水田も含めると10数種類のトンボが松毛川とそのまわりに住んでいたことがわかっています。



ギンヤンマ

ところが平成15年（2003）頃から、外来種の浮遊植物（水底に根を張らず、水に浮いている植物）であるホテイアオイがものすごい勢いで増え始め、夏になると水中の豊富な栄養を吸って隙間が無いくらいまで増えて、1m以上にまで伸びたものが見られるようになりました。そのため開けた水面が必要なウチワヤンマ、オオヤマトンボはほとんど見られなくなり、この期間の調査では、見つけることができませんでした。ホテイアオイが水面を覆いつくしていた時期の調査では、わずかにシオカラトンボとギンヤンマの2種が見つかったのみです。この2種のトンボは、すき間がないほど生えたホテイアオイの中にほんの少し残された開けた水面に見られるだけで、トンボ全体の数も非常に少なくなってしまいました。



シオカラトンボ

平成15年（2003）夏頃から、ホテイアオイを取り除く作業が始まり、オイルフェンスを利用した作業が行われ、開けた水面が見られるようになりました。その結果平成16年（2004）夏には広がった水面の上に多くのシオカラトンボとギンヤンマが見られるようになりました。

また、野鳥の調査を担当されている滝道雄さんから、ウチワヤンマやオオヤマトンボと思われるトンボを見たという情報が入りました。

平成17年（2005）には南の地方から北へ分布を拡げている台湾ウチワヤンマが見つかりました。台湾ウチワヤンマはその後、毎年見つかっていて、完全に松毛川のトンボの一員となったようです。

台湾ウチワヤンマ



平成 19 年 (2007) には^{ひさ}久しぶりにクロイトトンボとコフキトンボも見ることができました。

このように、^{まつげがわ}松毛川は^{じょきよ}ホテイアオイを^{あと}除去した^{すこ}後、^{せいぶつ}生物が^ふ増えて^{すいしつ}きている^{あいか}よう^よです。しかし、^{よご}水質は^{みず}相^{なが}変わらず^こ良くな^こって^こはい^こません。それどころか^{まつげがわ}汚れた^{かんきょう}水が^よど^よん^よど^よん^よ流^よれ^よ込^よんで^よい^よます。それでは^{まつげがわ}どうしたら^{かんきょう}松毛川の^よ環境が^よより^よ良^よくなる^よので^よし^よう^よか。

松毛川の環境を良くしていくには

^{まつげがわ}松毛川の^{さいだい}最大^{とくちゆう}の特徴^{むかし}は、^{かせん}昔^{あと}の^{いけ}河川^{かたち}の^{のこ}跡^{のこ}が^{かた}池^{のこ}の^{かた}ような^{のこ}形^{のこ}で^{のこ}残^{のこ}さ^{のこ}れた、^{みかづきこ}「三日^{かんきょう}月^{かわ}湖^{かわ}」^{かんきょう}である^{かんきょう}という^{かんきょう}こと^{かんきょう}です。この^{かんきょう}よ^{かんきょう}う^{かんきょう}な^{かんきょう}環^{かんきょう}境^{かんきょう}は、^{なが}川^{こうじ}の^か流^かれ^かを^か工^か事^かに^かよ^かっ^かて^か変^かえ^かた^かし^かて^から^か工^か事^かが^か終^かわ^かると^かほ^かと^かん^かど^かが^か埋^かめ^か立^かて^から^かれ^かて^かし^かま^かい^かます。その^かた^かめ^かこ^かの^かよ^かう^かな^か環^{かんきょう}境^{かんきょう}が^{のこ}残^{めづら}っ^{めづら}て^{めづら}い^{めづら}る^{めづら}こ^{めづら}とは^{めづら}たい^{めづら}へ^{めづら}ん^{めづら}珍^{いけ}しい^{ぬま}の^{いけ}です。また、^{いけ}池^{しすい}や^い沼^いや^い沼^いや^いた^いめ^い池^いと^いい^いた^い止^い水^い域^いが^い少^いない^い静^い岡^い県^い東^い部^い・^い伊^い豆^い地^い方^いで^いは^い特^いに^い貴^い重^いな^い、^い池^いや^い沼^いの^いよ^いう^いな^い環^{かんきょう}境^{かんきょう}で^いす。また、^い水^い辺^いを^い取^いり^い囲^いむ^い河^い畔^い林^いは、^{まつげがわ}松毛川^{ほか}の^み他^みで^みは^みあ^みま^みり^み見^みら^みれ^みない^み景^{けしき}色^{けしき}で^{けしき}す。この^{はやし}林^{はやし}は^{まつげがわ}松毛川^{まつげがわ}に^{まつげがわ}住^{まつげがわ}ん^{まつげがわ}で^{まつげがわ}い^{まつげがわ}る^{まつげがわ}生^{まつげがわ}物^{まつげがわ}だ^{まつげがわ}け^{まつげがわ}で^{まつげがわ}な^{まつげがわ}く^{まつげがわ}松^{まつげがわ}毛^{まつげがわ}川^{まつげがわ}を^{まつげがわ}利^{まつげがわ}用^{まつげがわ}す^{まつげがわ}る^{まつげがわ}多^{まつげがわ}く^{まつげがわ}の^{まつげがわ}生^{まつげがわ}物^{まつげがわ}に^{まつげがわ}と^{まつげがわ}っ^{まつげがわ}て^{まつげがわ}、^{まつげがわ}と^{まつげがわ}と^{まつげがわ}も^{まつげがわ}大^{まつげがわ}き^{まつげがわ}な^{まつげがわ}役^{まつげがわ}割^{まつげがわ}を^{まつげがわ}持^{まつげがわ}っ^{まつげがわ}て^{まつげがわ}い^{まつげがわ}ます。

今^{いま}の^{まつげがわ}松毛川^{まつげがわ}は、^{すいしつ}水^{あつか}質^{あつか}が^{よご}悪^{よご}化^{よご}し^{よご}汚^{よご}れ^{よご}や^{よご}泥^{よご}が^{よご}底^{よご}に^{よご}厚^{よご}く^{よご}溜^{よご}ま^{よご}っ^{よご}て^{よご}い^{よご}ま^{よご}す。松毛川の環境を良くするためには、^{さいしよ}まず^{よご}最^{よご}初^{よご}に^{よご}汚^{よご}れ^{よご}や^{よご}泥^{よご}を^{よご}取^{よご}り^{よご}除^{よご}く^{よご}こ^{よご}と、^{いちばん}これ^{いちばん}が^{いちばん}一^{いちばん}番^{いちばん}大^{いちばん}事^{いちばん}な^{いちばん}こ^{いちばん}と^{いちばん}です。ホ^{いじよう}テ^{いじよう}イ^{いじよう}ア^{いじよう}オ^{いじよう}イ^{いじよう}だ^{いじよう}け^{いじよう}が^{いじよう}異^{いじよう}常^{いじよう}に^{いじよう}増^{いじよう}え^{いじよう}る^{いじよう}と^{いじよう}い^{いじよう}う^{いじよう}こ^{いじよう}と^{いじよう}は、^{まつげがわ}松毛川^{まつげがわ}が^{よご}と^{よご}と^{よご}も^{よご}汚^{よご}れ^{よご}て^{よご}い^{よご}る^{よご}こ^{よご}と^{よご}を^{よご}示^{よご}して^{よご}い^{よご}ま^{よご}す。汚^{よご}れ^{よご}が^{よご}こ^{よご}れ^{よご}以^{よご}上^{よご}ひ^{よご}ど^{よご}く^{よご}な^{よご}ら^{よご}な^{よご}い^{よご}よ^{よご}う^{よご}に^{よご}す^{よご}る^{よご}た^{よご}め^{よご}に^{よご}は、^{まつげがわ}松毛川^{まつげがわ}に^{まつげがわ}入^{まつげがわ}っ^{まつげがわ}て^{まつげがわ}く^{まつげがわ}る^{まつげがわ}水^{まつげがわ}を^{まつげがわ}き^{まつげがわ}れ^{まつげがわ}い^{まつげがわ}に^{まつげがわ}す^{まつげがわ}る^{まつげがわ}こ^{まつげがわ}と^{まつげがわ}と^{まつげがわ}も^{まつげがわ}効^{まつげがわ}果^{まつげがわ}的^{まつげがわ}で^{まつげがわ}す。

トンボ類^{るい}については、明るく開放^{あか}的な環境^{かいほうてき}がなくな^{かんきょう}ないように
 することと、水草類^{みずくさるい}がトンボが住むの^すにちょうど良く生^よえるこ
 と。この2つが最大^{さいだい}のポイント^{とく}です。特に、ホテイアオイ^とを取り
 除^{のぞ}くことで復活^{ふっかつ}した浮葉植物^{ふようしょくぶつ}（根^ねが水底^{みずそこ}にあり葉^はが気中^{きちゅう}に出る）
 のヒシや、ヨシ、マコモ、ショウブ^{ちゅうすいしょくぶつ}等の抽水植物^{ねもと すいちゅう}（根本^{こんぽん}は水中^{ちゅうすい}に
 あり茎^{くき}や葉^はが気中^{きちゅう}に出る）の存在^{そんざい}は、トンボ類^{るい}の生息^{せいそく}に欠^かかせない
 ものなのです。

松毛川^{まつげがわ}には特別^{とくべつ}に珍^{めづら}しい種^{しゅ}はすんでいませんが、ここ松毛川^{まつげがわ}の
 価値^{かち}は珍^{めづら}しい生物^{せいぶつ}がいるかどうか^きだけで決^きまるものではありません。
 昔^{むかし}の狩野川^{かのがわ}が三日月湖^{みかづきこ}として残^{のこ}り、そのまわり^{しぜん}りに自然^{はやし}の林^{はやし}
 があること。それ^{まつげがわ}だけでもここ松毛川^{かち}の価値^{じゅうぶん}は十分^{じゅうぶん}でしょう。

かんしゅう
監修

ここはだいがくひじょうきんこうし
常葉大学非常勤講師・日本蜻蛉学会
にほん とんぼがっかい

かすや まこと
加須屋 真

ウチワヤンマ



まつげがわ 松毛川のトンボ調査

期間：令和5年（2023）6月、8月、9月の3回

範囲：松毛川全域

方法：調査員1名が調査対象地の予め決定したルート歩いて調査するルートセンサス法により、トンボ群集全体を定量的に調査しました。ルートについては水辺を中心とし、地形や植生、土地利用なども考慮して決定しました。識別の難しい種については捕虫網で捕獲して同定してから記録しました。調査で確認されたトンボは、各種ごとに生態写真を撮影のうえ、目撃数を記録しました。

ホソミイトトンボ



ちょうさ けっか 調査の結果：

①ウチワヤンマとタイワンウチワヤンマ

ウチワヤンマは、『平地にある周囲を樹林に囲まれた開放水面が広がる池沼や湖』を嗜好する止水性サナエトンボです。

全国的に見れば決して珍しい種ではないですが、ため池などの止水域が少ない静岡県東部や伊豆では生息環境そのものが限られることから意外に目にする機会が少ないトンボです。

松毛川はウチワヤンマの貴重な産地だったのですが、平成15年（2003）ごろのホテイアオイの異常繁茂による開放水面の消失、また枯死による水質悪化の影響からか、その後確認されていません。一方、ウチワヤンマと近縁で生態的にも共通性が高いタイワンウチワヤンマは、現在では松毛川を代表するトンボの一つです。ウチワヤンマと置き換わる形で、現在松毛川に生息しています。

松毛川・トンボ類調査結果

	最上流部	中流部 駐車場脇付近	下流部	三島市
<カワトンボ科>				
1. ハグロトンボ		○	○	
<イトトンボ科>				
2. ホソミイトトンボ		○	○	
3. アオモンイトトンボ	○	○	○	
<ヤンマ科>				
4. ギンヤンマ	○	◎	○	
<サナエトンボ科>				
5. タイワンウチワヤンマ	○	○	○	
<ヤマトンボ科>				
6. オオヤマトンボ	○	○	○	
<トンボ科>				
7. スナアカネ			▲（水田）飛来種	
8. ナツアカネ	◎	◎	◎	◎
9. アキアカネ	○	○		○
10. コノシメトンボ			○（水田）	
11. コシアキトンボ	○	○		○
12. ウスバキトンボ	◎	◎		◎
13. シオカラトンボ	◎	◎	◎	○

◎＝記録数最大値2桁以上、○＝記録数最大値1桁、▲＝飛来種

※注目すべき種・・・ホソミイトトンボ、スナアカネ

②オオヤマトンボ

オオヤマトンボもウチワヤンマと同様、『平地にある周囲を樹林に囲まれた開放水面が広がる池沼や湖』を選好する止水性のヤマトンボ科の一種です。オオヤマトンボは台湾ウチワヤンマと違って、水面上を主に岸边に沿って広範囲に飛翔し縄張りを作ります。夏の松毛川を特徴づけるトンボです。

③コシアキトンボ

コシアキトンボも『平地にある周囲を樹林に囲まれた池沼』を選好する止水性のトンボ科の一種です。コシアキトンボの場合、むしろ岸边の水面上に樹木の枝が張り出し、やや閉鎖的な空間を選好する傾向があります。岸边に河畔林を持つ松毛川はまさにコシアキトンボの選好する環境です。

コシアキトンボ



④コフキトンボ

コフキトンボもコシアキトンボ同様、『平地にある抽水植物の繁茂した開放水面が広がる池沼や湖』を選好する止水性のトンボ科の一種です。台湾ウチワヤンマやオオヤマトンボと同様、全国的には普通種ですが、**東部・伊豆では産地が少ない**です。近隣の確実な産地は伊豆の国市浮橋の施設内の池と沼津市原のアクアプラザ内の湧水池です。このような状況から松毛川の個体群の貴重性が高まっています。

⑤アカトンボ属（スナアカネ・ナツアカネ）

スナアカネは主に水生植物がまばらに生育する浅い池沼にみられるアカトンボの一種です。**松毛川では2022年度に1匹のみが初記録**されました。本種は国内では確実な発生地はなく、海外からの飛来種とされています。

ナツアカネ



まつげがわ さかな 松毛川の魚たち

ぎよるい すいせいせいぶつちようさ 魚類などの水生生物調査

かのがわ かせきこ みかづきこ まつげがわ す ぎよるい
狩野川の河跡湖・三日月湖である松毛川に住んでいる魚類の
ぶんぶ せいそくげんじよう あき げんちちようさ れいわ ねん
分布や生息現状を明らかにするために、現地調査を令和2年
(2020) から令和5年(2023) に実施しました。

さいしゅほうほう あみ てあみ ちゆうしん とあみ
採取方法はタモ網(手網)を中心に、投網とモンドリ(セルビ
ン、ビンドウ)を使いました。松毛川の調査地の多くは、川底に厚
く汚泥が積もっているため、全域の調査は非常に難しく、定量的
な調査(ある種がどれくらいの量生息しているか)はあきらめな
ければなりません。投網は深い場所に打てば、自転車や番線
などの金属製のごみがかかるだけでなく、調査地の多くを占める
泥底の部分では、網を引きあげて回収することも困難でした。ま
たモンドリも成果が限られていました。そのため、主に水辺に近づ
きやすい河畔の水際を、タモ網ですくう方法で調査を実施しまし
た。

みかづきこ まつげがわ かのがわ そそ ぜんいき
三日月湖である松毛川が、狩野川に注ぐまでのほぼ全域で、
さがんがわ ぬまづしがわ ちゆうしん さいしゅうちようさ じっし さいしゅう
左岸側(沼津市側)を中心に採集調査を実施しました。採集し
た魚類等はその場で同定(生物の分類上の所属を決定すること)
し、小型の個体など詳細な分類作業が必要なものは、研究室に持
ち帰りました。その際もエアレーション(水に空気の泡を送り込
むこと)をして生きたまま持ち帰り、小型のものは飼育によって
同定できるようになりました。また、松毛川に注ぐ農業用の水路
や水田も調査し、地点毎に確認した種類を記録しました。



とあみ
投網



あみ
夕毛網



ほかく さかな
捕獲された魚

さいしゅちようさ ぶんぶ かくにん ぎよるい か しゅ せま
採取調査により分布が確認された魚類は、6科18種です。狭い

はんい わり しゅるい きろく
範囲の割にはたくさんの種類を記録することができた。

しかし、^{かくにん}確認された^{しゅるい}種類の内訳^{うちわけ}を^{ぶんせき}分析すると、^{けつ}決して^{よろこ}喜べるものではありません。外来種^{がいらいしゅ}や他の地域^たから移入^{ちいき}された種類^{いにゆう}が、目立^{しゅるい}って多^めいからです。外来種^{がいらいしゅ}はカダヤシ、カムルチー、ブルーギルの^{しゅるい}3種類で、国内^{こくない}の他の地域^たから移入^{ちいき}された種類^{いにゆう}は、オイカワ、ヌマムツ、カワムツ、タモロコ、ニゴイ、カマツカ、ギギの^{しゅるい}7種類にも^{およ}及んでいます。オイカワは古^{ふる}くにこの地方^{ちほう}に移入^{いにゆう}された魚類^{ぎよるい}で、天然^{てんねん}分布^{ぶんぶ}と考^{かんが}える人も^{ひと}多^{おほ}い魚^{さかな}です。残り^{のこ}の6種類^{しゅるい}はオイカワと比^{くら}べると比^ひ較^{かくてき}的^{あた}新^{あたら}しく狩野川^{かのがわ}に入^{はい}ってきたようですが、狩野川^{かのがわ}水系^{すいけい}へのアユの放流^{ほうりゆう}に伴^{ともな}って持^もち込ま^これたものであり、既^{すで}にかなり安^{あんてい}定^{たい}した個^こ体^{たい}群^{ぐん}を形^{けい}成^{せい}しています。

ギギ



とくちょうぎ めだ かぎよるい かいゆうせい さかな しゅうへんぎよ
 特徴的に目立つのはハゼ科魚類などの回遊性の魚や周辺魚
 よ うみ おお ぎよるい かのがわ
 と呼ばれる海とのつながりが大きい魚類です。これは、狩野川の
 ぎよるいそう とくちょう
 魚類相の特徴です。

まつげがわ かず せいそく きたい か
 松毛川にまとまった数の生息が期待されていたのは、コイ科の
 ざいらいしゆ せいいたいがくてきぶんるい
 在来種やメダカ、ドジョウ、ナマズなどの、生態学的分類で
 じゆんたんすいぎよ ぎよるい しゆるい しゆ せいそく
 純淡水魚とされる魚類です。種類はかろうじて6種でしたが、生息
 みつど ひじょう ひく かんきょうしょうばん
 密度は非常に低いものでした。メダカは環境省版レッドデー
 つづ しずおかけんぼん ぜつめつきぐ 2 るい
 タブックに続いて、静岡県版レッドデータブックでも絶滅危惧Ⅱ類
 とく かのがわすいけい しずおかけんとうぶ やせい
 にランクされました。特に、狩野川水系など静岡県東部では野生の
 まれ はんしよくりよく こうげきせい つよ がいらいしゆ
 メダカは稀になっています。繁殖力と攻撃性の強い外来種のカ
 ざいらいしゆ くちく おか し
 ダヤシは在来種のメダカを駆逐して置き換わることが知られてい
 まつげがわ けいこう み へいせい ねん ちょうさ
 て、松毛川でもその傾向が見られます。平成16年(2004)に調査し
 とき せいそく かくにん こんかい ちょうさ
 た時にはメダカの生息が確認されていましたが、今回の調査では
 かくにん
 確認することができませんでした。

メダカ



まつげがわ み さかな
松毛川で見つかった魚

目名	科名	種名	備考
コイ	コイ	コイ	移入種
		ギンブナ	
		オイカワ	移入種(狩野川水系)
		カワムツ	移入種(狩野川水系)
		アブラハヤ	
		モツゴ	
		タモロコ	移入種(狩野川水系)
		カマツカ	移入種(狩野川水系)
	ドジョウ	ドジョウ	国:準絶滅危惧、県:情報不足
ナマズ	ナマズ	ナマズ	
カダヤシ	カダヤシ	カダヤシ	特定外来生物
スズキ	サンフィッシュユ	ブルーギル	特定外来生物
	ハゼ	オオヨシノボリ	
		シマヨシノボリ	
		トウヨシノボリ	
		ゴクラクハゼ	
		スミウキゴリ	
		ルリヨシノボリ	



カダヤシ



モツゴ



アブラハヤ

ドジョウ



まつげがわ こんちゅう 松毛川の昆虫たち

こんちゅうるい ちょうさけつか 昆虫類の調査結果

期間：令和5年（2023）7月、9月、12月の3回

範囲：松毛川の河畔林、周辺の草地、農地

方法：①目視による確認や任意採集法（スウィーピング法・ビーティング法）による捕獲調査、②夜間のライトトラップ調査（灯火採集法：夜間に灯火に集まる昆虫類の習性を利用して採集する方法）、③「わら巻き」調査（樹幹に1本ずつわらを巻き、何日か放置してから外し、わらと樹皮との間に侵入した小動物の種類と個体数を調査する方法）の3つの調査を行いました。

にんいさいしゅうちょうさ 任意採集調査



任意採集とライトトラップ調査の結果：

280種の昆虫類を確認しました（そのうち45種はライトトラップ調査でのみ確認しました）。その内訳は：

トンボ目：5科12種、ゴキブリ目：2科2種、カマキリ目：1科2種、バ
 ッタ目：10科16種、ハサミムシ目：1科1種、カメムシ目：30科61種、
 アミメカゲロウ目：2科4種、コウチュウ目：21科93種、ハチ目ハチ
 類：9科19種、ハチ目アリ類：1科14種、ハエ目：16科25種、チョウ目
 チョウ類：5科23種、チョウ目ガ類：5科8種でした。

ライトトラップ調査



まつげがわ み
 松毛川で見つかったレッドリストに掲載されている種

- ・カトリヤンマ (県RL: 準絶滅危惧)
 - ・コガムシ (県RL: 準絶滅危惧・環境省RL: 情報不足)
 - ・ヒゲコガネ (県RL: 準絶滅危惧)
 - ・ヤマトアシナガバチ (環境省RL: 情報不足)
 - ・コムラサキ (県RL: 要注目種(N-II))
 - ・サトキマダラヒカゲ (県RL: 要注目種(N-III))
 - ・ヒメジャノメ (県RL: 要注目種(N-III))
- ※県RL: 静岡県版レッドリスト 2020

ヒゲコガネ



ヤマトアシナガバチ



わら巻き調査

全体では 29本の樹木にわらを巻いて調査し、47種1,366頭のクモ類等を含む小動物を確認しました。

今回、松毛川沿いで実施した「わら巻き」からミナミアオカメムシ、ツヤアオカメムシなどの害虫に加え、トビイロマルハナノミやキアシクビボソムシ、捕食性のフクログモ類やハエトリグモ類など多くの昆虫類やクモ類などの小動物を確認することができました。また、個体数の多かったトビイロマルハナノミの越冬数の推移は、松毛川の水辺環境の指標になる可能性があり、今後も注目していく必要があります。



「わら巻き」調査



「^まわら^{たん}巻^{こんちゅうるい}き」は単に昆虫類やクモ類^{るい}などの^{えっとうばしょ}越冬場所^{ていきょう}を提供するだけでなく、^{つうねん}通年巻いておくことにより^{せいかつばしょ}生活場所にもなり、^{しゆ}種^{たようせい}の多様性を維持^{いじ}するために^{こうかてき}効果的^{こうかてき}です。

トビイロマルハナノミの^{しゅうだんえっとう}集団越冬



クヌギカメムシ



アカボシゴマダラ



ま ちよう さ けっか
「わら巻き」調査の結果

2023年7月28日設置 2023年12月21日調査		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
		ク ヌ ギ	タ ブ ノ キ	カ キ ノ キ	エ ノ キ	セ ン ダ ン	ム ク ノ キ	サ サ キ ノ キ	シ ロ ガ モ	ス ダ グ シ イ	ク ワ	シ ラ カ シ	コ ナ ラ	
1	ゴキブリ目 クロゴキブリ若虫	1											1	2
2	ゴキブリ目 モリチャバネゴキブリ若虫	2												2
3	バッタ目 カネタタキ		1											1
4	ハサミムシ目 ヒゲジロハサミムシ								1					1
5	カメムシ目 カワヤナギツヤカスミカメ											1		1
6	カメムシ目 コヒメハナカメムシ											1		1
7	カメムシ目 クヌギカメムシ	1												1
7	カメムシ目 クヌギカメムシ卵塊	50												50
8	カメムシ目 マルカメムシ				1									1
9	カメムシ目 クサギカメムシ			1	1				1					3
10	カメムシ目 ツヤアオカメムシ									1		1		2
11	カメムシ目 ミナミアオカメムシ			2	2									4
12	カメムシ目 アオモンツノカメムシ		1						1					2
13	アミメグロウ目 クサガゲロウsp.種						1							1
14	コウチュウ目 メダカチビカワゴミムシ	1												1
15	コウチュウ目 オオヒラタゴミムシ	1												1
16	コウチュウ目 フタモンヒゲフトハネカクシ												1	1
17	コウチュウ目 トビイロマルハナミ	292	15		3		111	39	2	34	17	4	63	580
18	コウチュウ目 ヤノナミガタチビタマムシ	1					3							4
19	コウチュウ目 カタヘニデオキスイ	1											1	2
20	コウチュウ目 ヒメオビオオキノコ	2												2
21	コウチュウ目 モンクチビルテントウ	5			3	2	1							11
22	コウチュウ目 ヨツボシテントウ									1				1
23	コウチュウ目 キアシクビボソムシ	68	7		7	1	15	8		19		7	21	153
24	コウチュウ目 ドウガネサルハムシ				1									1
25	コウチュウ目 クロウリハムシ								1					1
26	コウチュウ目 セマルトビハムシ	1				2	7							10
27	コウチュウ目 ヒメカメノコハムシ		2	1	5			3						11
28	コウチュウ目 オビデオソウムシ					12								12
29	コウチュウ目 アカオビタマクモノウムシ					1								1
30	コウチュウ目 ヒレルクチフトソウムシ	1												1
31	ハチ目 ヒメバチの一種					1								1
32	ハエ目 ショウジョウバエsp.												17	17
33	チリ目ガ属 ヒロヘリアオイラガ									1				1
34	チリ目ガ属 ヒモミノガ	10												10
35	チリ目ガ属 マダラマルハヒロズコガ幼虫	2					1	1				2		6
36	クモ目 カレハヒメグモ		1											1
37	クモ目 ヤマオニグモ			1						1				2
38	クモ目 コアシダカグモ									1				1
39	クモ目 アサヒエビグモ	5	6		2			1		1			1	16
40	クモ目 キハダカニグモ	7	9		14	4	6	9	5	9	2	4	3	72
41	クモ目 ナシトビグモ	4				1								5
42	クモ目 ヤハズフクログモ	63	33		22	25	2	20	19	22			5	211
43	クモ目 マダラスジハエトリ	1												1
44	クモ目 アリグモ	4				2							1	7
45	クモ目 ハエトリグモの一種	5											1	6
46	クモ目 フサヤステの一種	70	35					37						142
47	柄眼目 クチベニマイマイ										2			2
個体数		598	110	5	61	51	147	118	30	90	21	18	117	1366
種数		23	10	4	11	10	9	8	7	10	3	6	12	47
わら巻き本数		8	3	1	3	1	3	2	1	2	1	1	3	29
樹木1本あたりの個体数		74.8	36.7	5.0	20.3	51.0	49.0	59.0	30.0	45.0	21.0	18.0	39.0	
樹木1本あたりの種数		2.9	3.3	4.0	3.7	10.0	3.0	4.0	7.0	5.0	3.0	6.0	4.0	

まつげがわ りょうせいるい はちゅうるい 松毛川の両生類・爬虫類たち

りょうせいるい はちゅうるい ちょうさ 両生類・爬虫類の調査

きかん れいわ ねん (2020) から れいわ ねん (2023) の 4年間
期間：令和2年（2020）から令和5年（2023）の4年間

はんい まつげがわ かはんりん まつげがわ りんせつ た しゅうへん
範囲：松毛川の河畔林、松毛川に隣接する田んぼ周辺

ほうほう もくしおよ ほかく かくにんちょうさ
方法：目視及び捕獲による確認調査

ちょうさ けっか
調査の結果：

はちゅうるい 爬虫類

もく か しゅ はちゅうるい かくにん ほかにぶんるいぐん ちょうさいん
2目5科5種の爬虫類を確認しました（他分類群の調査員からの
じょうほうていきょう ふくむ かせんない み がいらいしゅ
情報提供を含む）。河川内で見られるほとんどが、外来種のミシ
シippアカミミガメでした。ミシシippアカミミガメは在来のカ
るい えさ にっこうよくぼしょなど あらそ ざいらい るいがい
メ類と餌や日光浴場所等をめぐって争うほか、在来のカメ類以外
すいせいしよくぶつ ぎよるい りょうせいるい こうかくるいとう えいきょう およ
に水生植物、魚類、両生類、甲殻類等にも大きな影響を及ぼし
ています。



ミシシippアカミミガメ

両生類

今回の調査では、1目3科5種の両生類を確認しました。

この地域の優占種はヌマガエルで、調査範囲内で見られるほとんどがヌマガエルでした。ヌマガエルは南方系のカエルで、主に西日本に生息していたのですが、近年分布域を拡大しており、静岡県内でも普通に見られるようになりました。他のカエル類より乾燥に強いため、休耕田や草地でも見られます。

ぎよるい こんちゅうるい りょうせいるい はちゅうるい かんしゅう
魚類・昆虫類・両生類・爬虫類 監修

とこはだいがくひじょうきんこうし
常葉大学非常勤講師

せきがわ ふみとし
関川 文俊

ヌマガエル



まつげがわ りょうせいるい はちゅうるい
松毛川の両生類・爬虫類

分類群	目名	科名	種名	備考
爬虫類	カメ	イシガメ	クサガメ	県:要注目種 (部会注目種)
		ヌマガメ	ミシシッピ アカミミガメ	外来種
	有鱗	ナミヘビ	ヤマカガシ	県:要注目種 (分布上注目種等)
		トカゲ	ヒガシニホントカゲ	
		カナヘビ	ニホンカナヘビ	
両生類	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル	
		アカガエル	ウシガエル	特定外来生物
			ツチガエル	県:準絶滅危惧
			トノサマガエル	国・県:準絶滅危惧
ヌマガエル	ヌマガエル			



ニホンカナヘビ

クサガメ



ヒガシニホントカゲ



まつげがわ すいしつ ゆうすい 松毛川の水質と湧水

生き物にとっての環境を調べるために、松毛川の水質調査も
行いました。また、p. 49から50に、松毛川周辺にある湧水の水源
を地図に示しています。

すいしつちようさ けっか 水質調査の結果

期間：令和5年（2023）8月、12月、令和6年（2024）2月

範囲：松毛川の最上流から最下流までの10ヶ所

方法：パックテスト（pH、全硬度、硝酸態窒素、COD）、
電気伝導度計、pH計による計量測定

ちようさ けっか 調査の結果：

水質が及ぼす魚類等への影響：調査結果より、一部「pH」（水
が酸性かアルカリ性か）あるいは「COD」（水質）の項目につ
いて基準値を超える場所が見られましたが、魚類を中心とした生
き物への影響はほとんどないことが分かりました。



まつげがわすいしつちようさ けっか
松毛川水質調査の結果

No.	調査地点	回	調査項目								
			水温 (°C)	電気伝導度 (mS/m)	pH	全硬度 (mg/ℓ)	硝酸態窒素 (mg/ℓ)	COD (mg/ℓ)	におい	濁り	色
1	最上流部	1	29.8	19.17	7.0	30	0.0	6	なし	中	褐色
		2	5.0	18.58	8.75	50	0.0	7	なし	中	褐色
		3	19.2	14.16	9.76	50	0.1	8	なし	中	褐色
2	上流部Ⅰ	1	30.1	18.63	7.5	50	0.0	6	なし	弱	褐色
		2	6.2	18.29	8.95	50	0.0	6	なし	中	褐色
		3	19.5	16.64	9.72	50	0.1	8	なし	弱	褐色
3	上流部Ⅱ	1	31.2	19.01	7.5	80	0.0	4	なし	弱	褐色
		2	10.8	19.68	7.20	50	0.2	2	なし	なし	なし
		3	21.1	16.99	8.61	50	0.5	6	なし	弱	なし
4	中流部Ⅰ	1	26.7	17.95	7.5	100	0.0	4	なし	なし	なし
		2	11.6	17.21	7.36	50	0.2	2	なし	なし	なし
		3	23.8	13.27	9.29	50	0.2	8	なし	なし	なし
5	中流部Ⅱ	1	26.9	17.98	7.5	80	0.0	4	なし	なし	なし
		2	10.8	17.73	7.26	50	0.2	2	なし	なし	なし
		3	20.0	18.14	8.08	70	0.3	4	なし	なし	なし
6	中流部Ⅲ	1	27.1	18.00	7.5	50	0.0	3	なし	なし	なし
		2	11.5	18.38	7.09	50	0.3	2	なし	なし	なし
		3	19.8	19.05	7.79	80	0.3	3	なし	なし	なし
7	下流部	1	27.4	18.68	7.0	50	0.2	3	なし	なし	なし
		2	12.0	24.00	7.18	50	0.5	8	なし	なし	なし
		3	19.9	21.90	7.45	70	0.5	4	なし	なし	なし
8	最下流部(水門)	1	27.1	19.04	7.0	50	0.2	4	なし	なし	なし
		2	13.0	22.20	7.20	50	0.3	7	なし	なし	なし
		3	19.5	20.40	7.52	70	0.3	4	なし	なし	なし
9	大溝川合流点	1	26.4	17.84	7.5	50	0.2	4	なし	なし	なし
		2	13.5	19.02	7.69	40	0.2	7	なし	なし	なし
		3	18.6	20.00	7.86	80	0.4	3	なし	なし	なし
10	中郷温水池	1	18.1	16.27	7.0	50	0.2	0	なし	なし	なし
		2	11.9	16.22	7.65	20	0.2	6	なし	なし	なし
		3	17.3	15.00	8.69	70	0.2	1	なし	なし	なし

ちようきこうもく かいせつ
調査項目の解説:

pH: 数字が小さいほど酸性、大きいほどアルカリ性。(酸性) 0~7 (中性) ~14(アルカリ性)

全硬度: 数字が大きいほど硬水、小さいほど軟水。

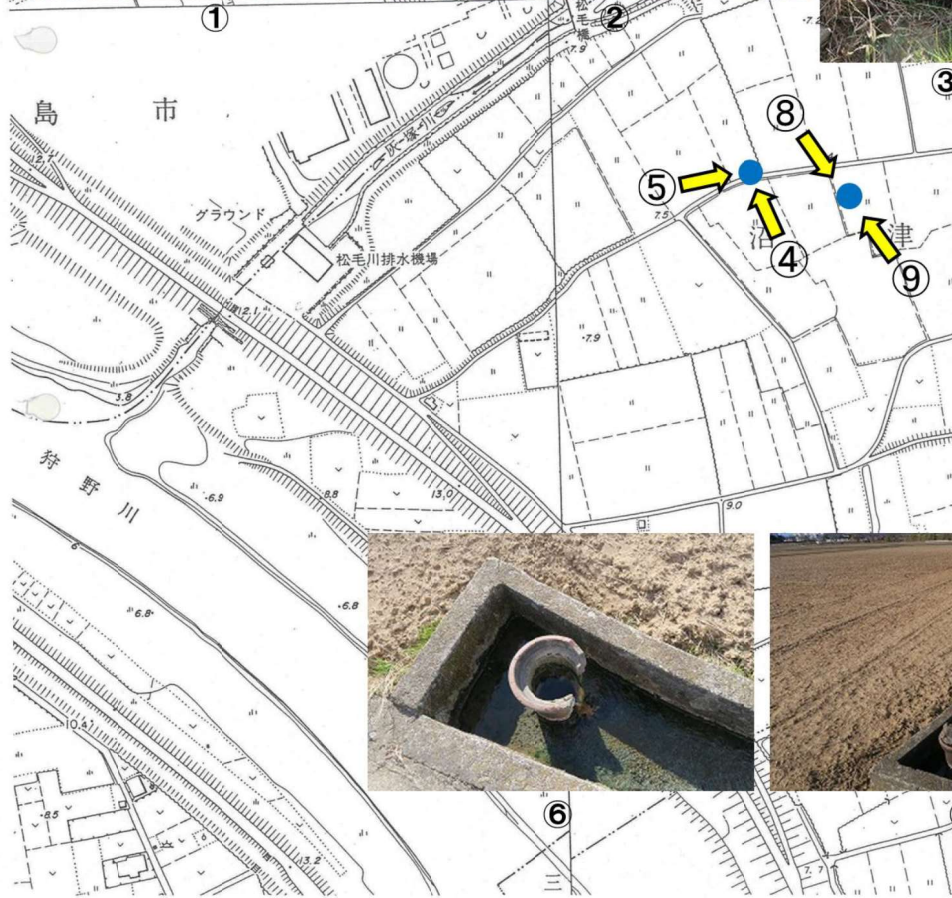
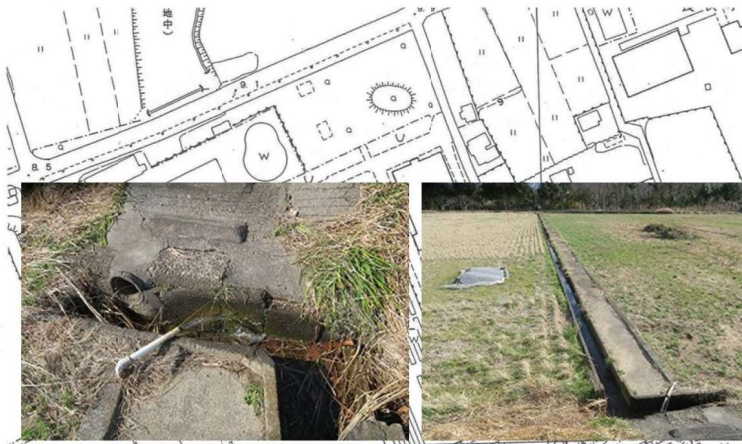
硝酸態窒素: 数字が大きいほど水が汚い。

電気伝導度: 電気の通りやすさ。数字が大きいほど水中の塩分(イオン)が多い。

COD: 数字が大きいほど水中の有機物が多い(数字が大きいほど汚い)。

まつげがわしゅうへん ゆうすい すいげん いちず むかし いど ぼしよ
松毛川周 辺の湧水の水源の位置図（昔の井戸などの場所）

ゆうすいすい
湧水水源



島 市

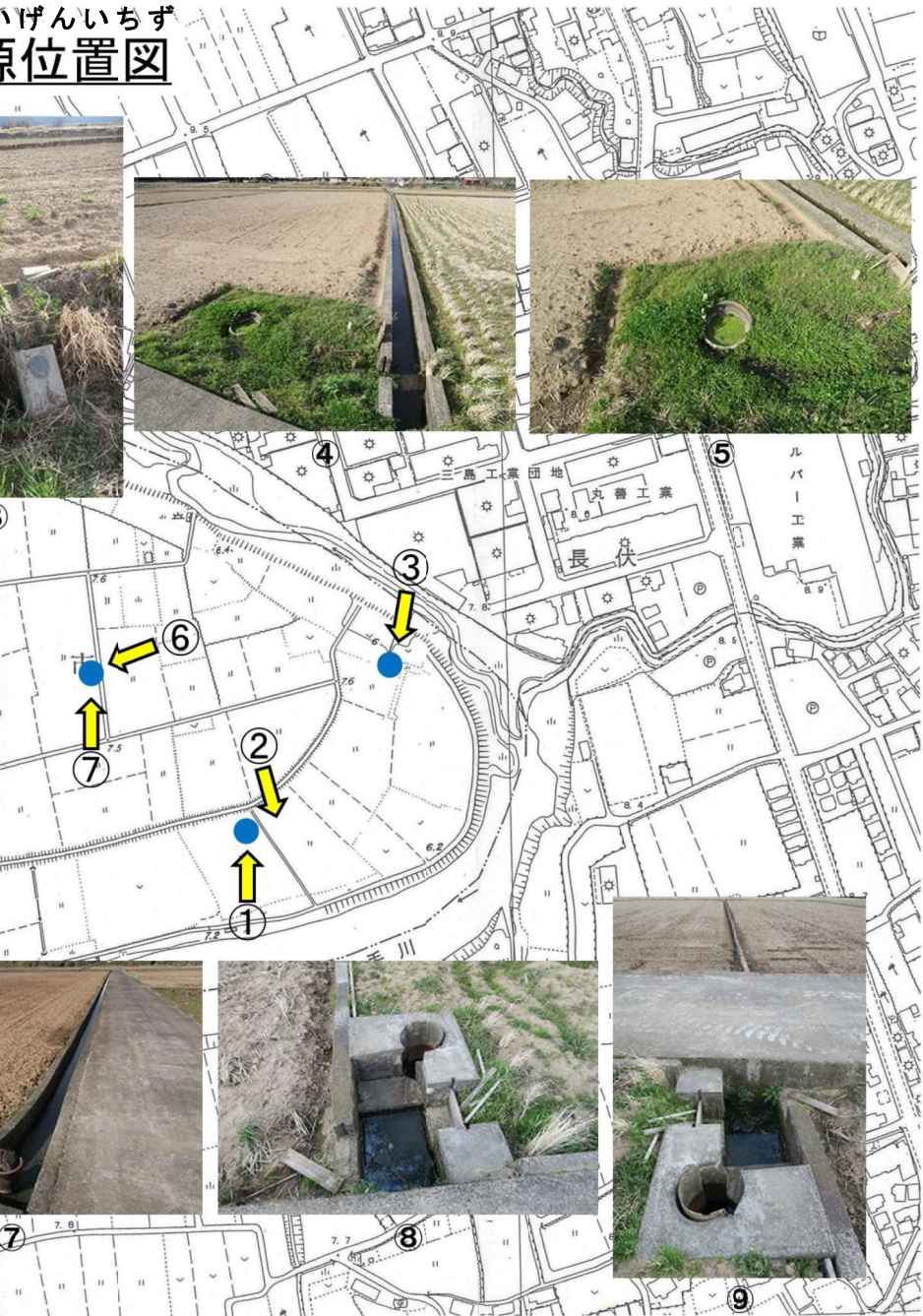
グラウンド

松毛川排水機場

狩野川

6

いげんいちず 原位置図



おわりに

環境調査のまとめ：

まつげかわ きちよう ちゆうもく い もの
松毛川の貴重な、注目すべき生き物は？

- ・ 昆虫類は、コガムシ、ヒゲコガネ、ウマノオバチ、ヤマトア
シナガバチ、コムラサキ、サトキマダラヒカゲ、ヒメジャノ
メ、コシロシタバを保全目標種（守りたい種類）とします。
- ・ 両生類・爬虫類は、トノサマガエル、ツチガエル、ヒガシニ
ホントカゲを保全目標種とします。
- ・ 鳥類は、シジュウカラ、ヤマガラ、メジロの樹木を好む鳥と
します。
- ・ トンボ類は、保全目標種をオオヤマトンボ、コフキトンボ、
復元目標種（戻ってきてほしい種類）をウチワヤンマとし、
誘致目標種（よそから来てほしい種類）はチョウトンボ、コ
ノシメトンボ、ネキトンボとします。
- ・ 魚類は、復元目標種をメダカ、保全目標種をドジョウとし、
特にメダカの生息環境の整備に気を付けます。
- ・ 植物は、ウキクサ、カサスゲ、ヨシ、マコモ、タチヤナギ、
セキショウなどの水生植物群落とします。
- ・ 樹木は、エノキ、ムクノキ、ケヤキなどとします。これらの巨木
が多く、他では見られない貴重な樹林帯といえます。

まつげがわ

松毛川のまわりのひとくちメモ

まつげがわ

松毛川のまわりの地名の由来

長伏（ながぶせ）

ながぶせ しる ふせ けいしゃち い み ち なが
 長布施とも記し、布施は傾斜地を意味することから、この地は長
 いゆるやかな傾斜地で、布施が伏に変わったと考えられます。

御園（みその）

こだい ちやうてい やさい けんじやう つ
 古代、ここから朝廷へ野菜を献上したことから付けられました
 た。昔は伊勢神宮領で源頼朝が旗上げに成功した時、三嶋
 大社に寄進したのもこの地といわれています。

安久（やすひさ）

ころう はなし やっ さわ い
 古老の話では、ヤッサー(八つの沢)のこととされています。
 上流からの用水が八つの堀に分かれて注いでいる説、また、最初
 に村を開いた人の名が安久だったことからこれが地名になったと
 いう説があります。

梅名（うめな）

うめ き おお のはら い み うめな な の
 梅の木が多い野原という意味です。梅名の「名」は「野」がな
 まって変わったものです。

松本（まつもと）

おお まつ き した けん いえ せつ かいたくしゃ
 大きな松の木の下に3軒の家があったという説と、開拓者の
 松本殿から付けたという説があります。

しんめいぐう みその

神明宮（御園）

御園にあるこの神社は、『吾妻鏡』や『豆州志稿』などの記録によると寛弘2年（1005）に創建され、天照大日靈尊が祀られています。源頼朝が蛭ヶ小島から兵を興して、いちはやく三嶋大社へ献納した社領はこの御園でした。

境内は広く、イマヌキ（30本余）、クスノキ（7本）、モチノキ、ケヤキ、などが多数植えられていて、何れもよく生育し、樹高30m前後のものが大部分です。中でも樹齢300年余と推定できるものとして、クスノキ（5本）、イマヌキ（5本）などがあります。

社叢（神社の森）もよく整備されていて、昭和59年（1984）に静岡県「ふるさと自然百選」に選定され、平成8年（1996）に三島市指定文化財天然記念物となっています。



ゆた すいでんちたい なかざとむら

豊かだった水田地帯・中郷村

なかざとちいき みしまし なんぶ ひろ すいでんちたい めいじ
 中郷地域は三島市の南部に広がる水田地帯です。ここは明治22
 ねん しちょうそんせいせいいてい ととき きんざい か そん あつ なかざとむら
 年(1889)市町村制制定の時に近在の16ヶ村が集まり「中郷村」が
 せいりつ こだい ちいきいったい なか ざと よ こと
 成りました。古代、この地域一帯が「中の郷」と呼ばれていた事
 により^{そんめい}村名となりました。

なかざとむら すいでん おお こはまいけ ゆうすい ようすい ひ りよう
 中郷村の水田の多くは、小浜池の湧水を用水として引き、利用し
 ています。しかし、湧水の水温が14℃～15℃と低いため、稲の生育
 に良いとはいえませんでした。そこで、せんご ようすい いちどちよすい
 戦後、用水を一度貯水し
 て^{あた}温め、ここから^{ぶんすい}分水する^{こうじ}工事が^{はじ}始まりました。こうして^{かんせい}完成し
 たのが^{なかざとおんすいち}中郷^{しょうわ}温^{ねん}水池、昭和27年(1952)のことです。温水池によっ
 て^{すいおん}水温が^{どあ}2度上がったといわれています。

なかざとむら みしまし がつべい しょうわ ねん がついつち
 中郷村と三島市が合併したのは昭和29年(1954)4月1日でした。

なかざとおんすいち
 中郷温水池



みしましりつこうえん らくじゅえん ない こはまいけ ふんしゅつ ふじさん
 三島市立公園「楽寿園」内の小浜池から噴出する富士山からの
 ゆうすい すいげん げんへいえいがわ ふる なかざとちいき すいでん かんがいよう
 湧水を水源とする源兵衛川は、古くから中郷地域の水田の灌漑用
 すいろ のうぎよう すいろ つか
 水路（農業のための水路）として使われてきました。

しかし、しょうわ ねんだいなか じょうりゅういき きぎょう ちかすい く
 昭和30年代中ごろから、上流域での企業の地下水の汲
 あ じんこうぞう すいどうしよう ぞうか げんいん ほうふ
 み上げや、人口増による水道使用の増加などの原因により豊富だ
 すいりょう げきげん かわ おせん
 った水量は激減し、川の汚染もひどくなりました。

この危機的な環境悪化の状態を問題視した川沿いの住民の
 ききてき かんきょうあつか じょうたい もんだいし かわぞ じゅうみん
 よ かつどう はってん へいせい ねん のうりんすいさんしょう
 呼びかけから、活動が発展し、平成2年（1990）に、農林水産省の
 のうぎようすいりしせつこうどりようじぎょう さいたく のうぎようようすいろ
 「農業水利施設高度利用事業」に採択されました。農業用水路の
 かんり だんたい なかごうようすい とち かいりょう くくみあい むかし みずべ
 管理団体である中郷用水土地改良区組合、昔の水辺を
 とりもどそう しみん えぬびーおーほうじん みしまなど
 取り戻そうとする市民（NPO法人グラウンドワーク三島等）、
 ぎょうせい じもときぎょう きょうりよく じっせんかつどう うつく みずべ
 行政や地元企業などの協力と実践活動により、美しい水辺
 かんきょう と もど
 環境が取り戻されました。



げんべえがわ
 源兵衛川

しょうわ ねん (1945) 以降、日本経済発展の影響を受け、豊かな水田
 ちたい ちたい なかざとちいき におお へん か しょうわ ねん
 地帯であった中郷地域にも大きな変化が生じました。昭和43年
 (1968)、中郷地域のほぼまん中を南北に走る形で、開通した国道
 ごうせん しもだ ぞ ちゅうしん しょうぎょうちか はじ
 136号線(下田バイパス)沿いを中心に、まず商業地化が始まり、
 つづ おお びでん たくちか すず
 続いて多くの美田をつぶして宅地化が進みました。

そして昭和42年(1967)には、長伏に三島市街地にある中 小
 きぎょう こうじょう あつ もくてき みしまこうぎょうだんち けんせつ
 企業の工場を集める目的で三島工業団地が建設されました。

こうして、奈良時代の条里制の跡が残る古くからの歴史を持つ
 なかさとちいき すいでん おお じよじよ うしな まつ
 中郷地域の水田の多くが徐々に失われていきました。しかし、松
 げがわ かはんりん しんめいぐう もり ながふせ みその ゆたか すいでんちたい
 毛川の河畔林や神明宮の森がある長伏・御園には、豊かな水田地帯
 げんふうけい のこ なかざとちいき か
 であった原風景がまだまだ残されています。ここは、中郷地域16カ
 せん
 村にあって、はりめぐらされた灌漑用水路の一番下流に位置し、
 か のがわ こうずい いくど せんじん たいへん くらう
 狩野川の洪水に幾度もおびやかされ、先人たちが大変な苦勞をし
 すいでん まも つづ ところ
 て水田を守り続けた所でもあるのです。

わたし みかた とし のうそん むす がわ さいせい
 私たちは、こうした見方から、「都市と農村を結ぶ川として再生
 げんへいえいがわ どうよう か こ げんざい みらい つな
 した源兵衛川」同様、過去から現在、そして未来へ繋げるために、
 まつ げがわ まも そだ かつどう つづ かんが
 松毛川を守り育てていく活動を続けていきたいと考えています。

みしまこうぎょうだんち

三島工業団地

てっこうだんち よ ば れ て みしまこうぎょうだんち しょうわ
鉄工団地とも呼ばれている**三島工業団地**は、**昭和36年(1961)**
 しないでてっこうどうしかい くみあい つくり みしまし みしましやうこう
に市内鉄工同志会(36人)が組合を作り、三島市と三島商工
 かいぎしょ きやうりよく ちゆうしやうきぎやうきほんほう こうがい ながふせ けんせつ
会議所が協力し、中小企業基本法により郊外の長伏に建設さ
れ、昭和42年(1967)に完成しました。


だんち けんせつ きぎやう こうどか たいしつかいぜん せつびきんだいか
この団地の建設により企業の高度化、体質改善、設備近代化な
どが進められ、活気がみられるようになりました。また、まちの
 すず かつき
中央部や住宅地にあった工場の移転により、その地域の騒音、
 ちゆうおうぶ じゆうたくち こうじやう いてん ちいき そうおん
臭気、排水などによる公害防止に役立っています。

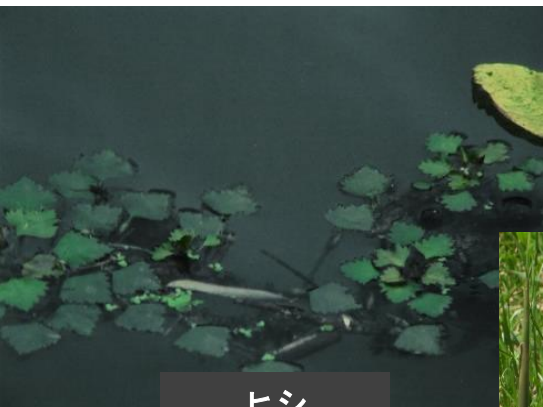
しゅつてんおよびさんこうしりやう

出典及び参考資料

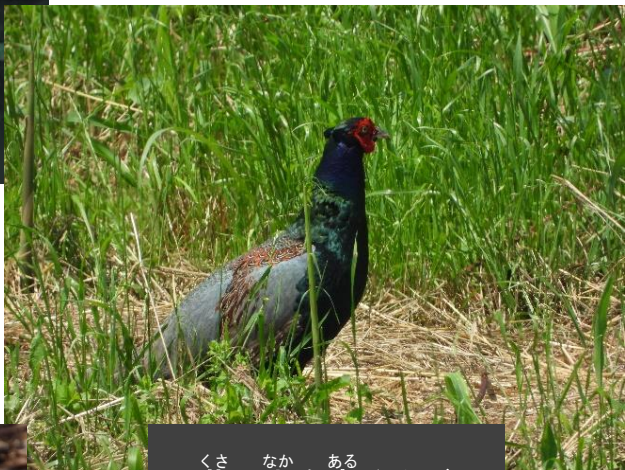
みしま だいひやつか
 『三島アメニティ大百科』p. 95-95、106、208、227

きやうどしりやうかん だい こう
 『郷土資料館だより第65号』


 まつげがわ
松毛川



ヒシ

くさ なか ある
草の中を歩くキジエノキの^{しゆし}種子^たを食べる^{ふゆどり}冬鳥のシメ

セスジツユムシ



ま っ げ が わ し ゅ う へ ん

松毛川周辺マップ



松毛川への行き方

- 三島駅から沼津登山東海バスで約30分
- トイレ・駐車場はありません。



ほうききりりん ほうさき
放置竹林の伐採



かほりん しょうりん
河畔林の植林



ほていあおい じよさく
ホテイアオイの除去作業

まつげがわ せんねん もり
松毛川「千年の森」
を再生!



げんざい まつげがわ
現在の松毛川

NPO法人グラウンドワーク三島



みんなで協力 地による環境改善

グラウンドワーク（以下GW）の活動は、身近な環境改善を目指し、1980年代にイギリスで始まり、1992年、「水の都・三島」の再生に取り組む三島ゆうすい

会等8つの市民団体が連携し、日本で最初のGW実践地として、GW三島実行委員会が誕生しました。1999年にはNPO法人の認証を受けました。

現在では、20の市民団体が参加し、市内70ヶ所以上で実践的な環境改善プロジェクトに取組んでいます。「右手にスコップ・左手に缶ビール」「議論よりアクション」をキーワードに活動が広がり、市民・行政・企業の三者の中核に存在する「専門性の高い仲介役的なNPO」の組織づくりをめざしています。

発行

NPO法人グラウンドワーク三島

〒411-0857 静岡県三島市芝本町 6-2

TEL: 055-983-0136 Fax: 055-973-0022

HP: <http://www.GWmishima.jp/>

監修

常葉大学非常勤講師 関川 文俊

日本野鳥の会東富士副代表 滝 道雄

常葉大学非常勤講師・日本蜻蛉学会 加須屋 真

富士山自然誌研究会会長 菅原 久夫

編集

NPO法人グラウンドワーク三島編集室

令和6年(2024)3月 発行